

機関番号：82620  
 研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20720024  
 研究課題名（和文） 「エフタル期」の図像資料の特定と考察：バーミヤン、ソグド、クチャを中心に  
 研究課題名（英文） Identification and examination of iconographic material of “the Hephthalite period” from Bamiyan, Sogdiana and Kucha  
 研究代表者  
 影山 悦子 (KAGEYAMA ETSUKO)  
 独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター  
 特別研究員  
 研究者番号：20453144

研究成果の概要（和文）：人物像の服飾や王冠、人物表現の特徴をもとに、中央アジア、特にバーミヤン、ソグド、クチャで発見されている図像資料の中から、エフタルが支配していた時代（5世紀後半～6世紀前半）に作成されたと推定される資料を特定した。長衣の右襟のみを折り返して着用する習慣はエフタルが支配していた時代に流行したと推測され、そのような長衣を身に付けた人物が表わされている資料は、5世紀後半から6世紀前半に作成された可能性が高い。

研究成果の概要（英文）：Among the iconographic material from Central Asia, especially from Bamiyan, Sogdiana and Kucha, those which are supposed to be made in the Hephthalite period (from the second half of the 5<sup>th</sup> century to the first half of the 6<sup>th</sup> century) were identified based on the type of dress and crowns and on the expression used to depict figures. Wearing a long robe with its right collar folded could have become popular during the Hephthalite period. It is possible that paintings in which figures are wearing such robe are dated to the second half of the 5<sup>th</sup> or the first half of the 6<sup>th</sup> century.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：ソグド文化史

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：中央アジア、ソグド、エフタル、図像

## 1. 研究開始当初の背景

エフタルとは5世紀後半にバクトリア（現在のアフガニスタン北部）を拠点として急速に勢力を拡大し、6世紀前半には中央アジアのほぼ全域を支配下に治めた遊牧民族であ

る。

エフタル支配期の造形資料は、これまで中央アジア美術史においてほとんど注目されてこなかった。その原因は、エフタルについて不明な点が多く、さらに遊牧民は文化的に

は定住民にさほど影響を与えなかったと考えられてきたからであろう。

## 2. 研究の目的

新たに中国やアフガニスタンで発見されている図像資料や文献資料により、エフタルに関する研究が進み、エフタルがクシャーン朝に匹敵するほど重要な影響を中央アジア地域に及ぼした可能性が明らかにされつつある。

このような視点から中央アジアで発見される図像資料を見直し、エフタル支配期もしくはその直後に製作された可能性の高い資料を特定することを目標とした。バーミヤン（アフガニスタン）、ソグド（現在のウズベキスタン北部とタジキスタン北部）、クチャ（中国新疆ウイグル自治区）の壁画を主たる対象とした。

## 3. 研究の方法

エフタルは広大な地域を版図としたが、エフタルが自ら残したことが確実な造形資料は、彼らが発行したと推測されるコインと、エフタル王の名が刻まれた印章のみである。本研究では、エフタルに由来する風俗（服飾や髪型）やエフタルの支配地域において製作された造形資料の検討を行った。

先行研究により、エフタル支配期に現在のアフガニスタンもしくはパキスタンで製作されたと推定されている銀器がある。装飾によって2つのグループに分けられる。第1のグループは、直径が15cmから20cmの銀碗で、外側全面に装飾がほどこされる。第2のグループは、器形は一定しないが、その装飾にインド美術の影響が強く認められる。

この他に、J. イリヤソフ氏の画期的な研究によって、エフタルに特徴的な服飾、髪型が明らかにされている。具体的には、鳥翼冠または三面の三日月冠をつけること、また長衣の右襟だけを折り返して着用することなどを挙げている。そして、これらの特徴を持つ人物象が、バーミヤン、ソグド、クチャなどの図像資料に登場することを指摘している。イリヤソフ氏の研究では、関連資料のうち代表的なものが挙げられていた。

本研究では、これらの先行研究による成果をふまえて、新たにエフタル期の図像資料を特定することをめざした。

中央アジア、中国で発見されている造形資料の中で、エフタル支配期に製作された可能性の高い資料として以下の資料群がある。

### 1. バーミヤン仏教石窟壁画

2. バクトリア出土の壁画と塑像（バラリク・テパ遺跡、ディルベルジン・テパ遺跡出土品など）

3. ソグディアナ出土の壁画と塑像（サマルカンド、ワラフシャ、ジャル・テパ、シャフリスタン、ペンジケント遺跡出土品など）

4. クチャ地区の仏教石窟壁画（キジル石窟、クムトラ石窟などの壁画）

5. バクトリアで製作されたと推測される銀器、印章、コイン

6. 中国に移住しエフタル期に活躍したソグド人の葬具（安伽墓、虞弘墓、翟曹明墓などから出土した葬具）

これらの資料の中から、製作年代が5世紀後半から6世紀前半であると推定されている資料を抽出した。製作年代の判定には、美術史の研究による編年だけでなく、放射性炭素年代測定の結果を利用した。

2009年6月23日から7月4日まで、ロシアのエルミタージュ美術館に赴き、ソグドの壁画、銀器をはじめ、クチャ地区の仏教石窟壁画など、同館が所蔵する関連資料の調査を行った。

## 4. 研究成果

### ①エフタルに特徴的な服飾

イリヤソフ氏の研究では、これらの特徴を持つ人物像を表した資料のうち、代表的なものだけが挙げられていた。本研究では関連資料を網羅的に収集した。

鳥翼冠、三面の三日月冠、長衣の右襟だけを折り返して着用する長衣を身に付けた人物は、バーミヤン石窟東大仏天井画の王侯貴族の中に見られる。

長衣の右襟のみを折り返して着用する人物は、アフガニスタン北部のディルベルジン・テパ遺跡出土壁画の人物像、ウズベキスタン南部のバラリク・テパ遺跡出土壁画の人物像、ウズベキスタン南部出土のテラコッタ像、新疆のキジル仏教石窟第8窟、69窟、104窟、207窟、224窟、新1窟の供養者像、同じく新疆のクムトラ仏教石窟第23窟の供養者像、エルミタージュ美術館所蔵銀碗の人物像などに認められる。

これらの資料の製作年代は、従来は、5世紀から7世紀頃に推定されているが、エフタルが中央アジアに勢力を拡大した5世紀後半から6世紀前半に限定することができるのではないかと考える。バーミヤン石窟東大仏とキジル石窟第8窟に対しては、放射性炭素による年代測定が行われているが、その結果もこの推測と矛盾しない。

ソグドの壁画には、長衣の右襟のみを折り返して着用している人物が一例も見つかっていない。両襟を閉じているか、もしくは両襟を開いているかのどちらかである。ソグドの壁画の大部分は、7世紀から8世紀に製作されている。5、6世紀には右襟のみを折り返して着用している人物像が描かれたが、現存しないだけなのかもしれない。

一方、三面三日月冠と鳥翼冠は、中国で発見されている6世紀後半のソグド人の葬具浮き彫りにも、8世紀前半のソグドの壁画にも数多く認められる。ペンジケント、シャフリスタンの壁画、シャフリスタンで発行されたコインにも見られる。「エフタル期」に広まった冠が定着し、次第に王冠として形式化したと考えられる。

### ②ソグドとクチャの壁画の人物表現に見られる共通点

500年頃に製作されたと推測されるソグドのペンジケント遺跡第Ⅱ神殿壁画の供養者像(図1)は、クチャのクムトラ石窟とキジル石窟の供養者像(図2)と多くの共通点を持つ。つま先で立っているように見える足先の描き方や、人物の周囲に表わされるつぼみの表現など、同じ特徴を持つことはすでに指摘されている。その他にも、下半身は正面向きに、上半身は斜めもしくは横向きに表す点、



図1：ソグド、ペンジケント遺跡第Ⅱ神殿壁画(500年頃)

また手を大きく表わす点も、共通している。

ペンジケントの供養者は、ゾロアスター教神殿の礼拝堂の女神の脇に描かれている。キジル石窟、クムトラ石窟は仏教石窟である。ゾロアスター教神殿と仏教石窟寺院に描かれた供養者像の表現方法に、これほど共通点があるのは、どのように説明されるだろうか。ソグドとクチャが、エフタルによって支配された時代に、このような特異な表現方法が生まれたと考えることができるかもしれない。

### ③今後の課題

バーミヤン、ソグドとクチャの図像資料の比較検討は、これまでも行われており、共通点や影響関係が論じられている。本研究の特色は、これらの地域の図像に見られる類似性を、当該地域がエフタルによって支配され、その影響下にあったことによって説明しようとする点にある。本研究によって特定された資料を、今後は「エフタル期」の図像資料として考察することができると思う。

新たに発見された文書資料によってエフタルの歴史を解明する研究が進められている。最新の研究成果を把握し、図像資料に残されたエフタルの影響を明らかにしていきたい。



図2：クチャ、キジル石窟第8窟壁画(5~6世紀初め)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

①影山悦子「ウスルシヤナの都城址カライ・カフカハ I 遺跡から出土した壁画について」  
日本オリエント学会第52回大会、2010年11月7日、国土館大学

[図書] (計1件)

①曾布川寛・吉田豊・斉東方・影山悦子『ソグド人の美術と言語』臨川書店、2011年、pp. 119-143.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

影山 悦子 (KAGEYAMA ETSUKO)

独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター・特別研究員

研究者番号：20453144